

氏 名 ^{はし}橋 ^{もと}本 や よ い
 学位(専攻分野) 博 士 (教育学)
 学位記番号 論教博第80号
 学位授与の日付 平成11年3月23日
 学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当
 学位論文題目 母親面接と母親の心
 — 母親の心を聴く —

(主査)

論文調査委員 教授 岡田康伸 教授 東山紘久 助教授 河合俊雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、著者の長年の母親への心理療法の体験をもとに、母親のころに関して述べたものである。本論文は、6章より構成されており、その要旨は以下の通りである。

第1章は、「母親の心の癒しと水子供養」と題される。子どもへのネガティブな感情や子どもを殺したい気持ちは、母親自身の個が殺されているという心的現実と関係が深いと指摘する。この関連を理解することが母親面接をすすめていく鍵になるともいう。個が殺されているという感情と水子のまま、胎児を流したという感情とは心の中で結びつく。したがって、水子供養は母親のころの癒しともつながることを論じる。また、この章は序論で、現代社会の中で、母親として生きていくことの大変さを述べ、母親のころをテーマにした背景を述べ、母親になるとはどういうことかを問題提起する。

第2章は、母親面接の方法論で、「母親面接のNarrativeについて一語られた子どもの『複合的な意味作用』」である。母親面接のやり方は「子どものための面接」と「母親のための面接」の2方向の考え方であった。しかし、「子ども」の問題の話は、母親自身の未解決の問題が重ねられていることを、3事例をあげて解く。そして、「子ども」の話を子どもと母親の境界の不明な中間領域の話として聴くことか母親をして安全に自らの内面に至らせることになることを主張する。これはどちらか一方からという従来の心理治療者の態度を一步すすめた、重要な、斬新な指摘であった。

第3章は、「『悪い母親』という問題」で、このテーマが2つの事例から論じられている。この2事例を通して、母親の心の闇へのさらなる理解が試みられた。ここでの重要な発見は、心理治療者が母親との出会いによって活性化された内なるネガティブ・マザーコンプレックスがからまって心理療法がすすむことである。また、ユングが指摘したことではあるが、実際に心理面接では、心理治療者とクライアントと立場が逆転する反転現象が生じていることがある。このことをも示した。蛇足かもしれないが、この反転現象を意識化し、把握することは、困難であり、それが出来ることは、著者の心理治療者としての上達を示すものである。

第4章は、「母親と移行対象—体感と個のはざま—」である。ウィニコットがいった移行対象は、子どもが母親から分離していく過程に生じるものであった。しかし、母親にも移行対象が生じることを示した。母親が、子どもと分離していく時、母親が子どもを移行対象とし、さらに心理治療者などを移行対象とした事例をあげる。この事例に生じた母親と心理治療者との融合体験は、母親の成長だけでなく、心理治療は、心理治療者の成長ともつながることを示した。

第5章は、「イメージとしての母娘関係」である。母娘という根源的な結合の強さとその一体感の中で、両者が分離していくことの困難さを示した。又、このような根源的な結びつきを言語で表現することは困難で、イメージの助け(本例では箱庭療法)が必要であることを主張した。また、この時、母と娘の体感を解放するためには、娘の側からの意識化の作業(アニムス)が必要であり、それを通してもたらされることを明らかにした。

第6章は、「母親自身の父娘関係について」である。母親の問題を考える時、その背後に母親の父親との関係が強い影響をもっていることを指摘した。

以上、母親のころに関連する重要なテーマを6章に分けて論じた。

論文審査の結果の要旨

本論文は著者が携わった8ケースを中心に、そこから得られた母親のころの一端を明らかにしたものである。

方法として、心理学では質問紙や投影法などによって研究を進めることもあるが、本論文は、事例をもとに、そこから得られたことを、先人たちが明らかにしてきたことと比較検討することにより、また、先人の知見を確かめることにより、水田宗子が「母の内面はなお未踏の女性のテリトリーであり、闇なのである」といった母親の心に著者なりの光を当てたものといえる。単に、追試的に確かめただけでなく、著者は、いくつかの新しい知見を主張している。

本論文のオリジナリティは、その方法にもあるが、先人たちが明らかにした考え、例えば、クラインの「良い母親」と「悪い母親」の考えを、たんに2分して、「良い母親か」「悪い母親か」と単純に考えることができないことを主張する。どちらかに割り切ってしまう考えをしりぞけ、「どちらであろうか?」「どちらもである」などと揺れていることこそ、母親の本質に近づけるのではないかという。これは、著者が心理治療をしていく中で見出したものである。又、そのように心理治療者が揺れているからこそ、母親は、ころの深いところを表出させ、それか治療につながるという。また、母親面接では、母親は子どもの話をするところから治療に入っていくことが多い。その時、単に子どもの話としてだけ聞くのではなく、母親自身の話としても聞く。これは、母親の内なる子どもとして子どもの話を聞くなどとして今まで指摘されてきた心理治療者の態度であるが、著者は、さらに一歩すすめて、子どもの話題を母子の境界の不明な中間領域の話題として聴くことか母親をして安全に内面に向かわせることになることを指摘する。このことは心理治療者もコミュニタスとしての中間領域に入ってくるようになって、まさに、心理治療者の新しい姿勢を示しており、この論文における重要なオリジナリティーであると思われる。さらに、オリジナリティーをもう一点あげる。第5章でのべられた、母・娘間の世代間にわたる一体感を解放するのは娘の力（アニムス）であるという指摘は斬新なものである。娘が（本例では16才の夜尿を主訴とするS子）「母なる世界からの出立と私という個の誕生」を心理治療で成し遂げる時、母親の成長も可能となった。従来、不登校児の場合など、当人が来談しない時、母親の心理治療がすすむと、当人も来談したり、学校に行ったりする事例は報告されている。このような現象は、ひとつの常識である。本例はその逆もあることを証明したことになる。

このような、新しい指摘がなされているが、一方で、せつかくの新しい知見が、先人たちの考えと一致するという洞察で終わっており、残念である。もう一歩深い洞察が可能ではという審査員の指摘もあった。一方、本論文の展開の可能性がおいにあるという指摘もあった。例えば、第1章では、女性（母親）が水子の夢を報告することはあるが、男性（父親）が水子の夢をみたという報告は皆無に近いのではないか。これをどう考えるか、また、流産の場合も、自然に流産となり、胎児が流れてしまう場合と、人工的に流してしまった場合とで、母親に与える影響はどのようであろうかなど、いろいろな研究の可能性と母親をめぐる複雑な今後の問題が指摘された。

「母親が個として生きるとは?」というテーマは、折り触れ記述されてはいるが、余りに大きな問題であり、不十分さは感じられる。しかし、現代の女性が直面している問題を根底にすえながら、母親の心をめぐる側面をあきらかにしたことは、高く評価できる。また、本論文は、母親の心の一端を示しただけでなく、母親面接の方法や一般の心理療法の面接のあり方への新しい方法を示唆している点など、大いに臨床心理学に寄与すると評価された。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成11年2月10日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。